

高山寺の開祖・明恵について

明恵(1173~1232 年)は仏教思想、芸術、茶に対する貢献で広く知られる。彼の仏教への傾倒は、8 歳で両親を亡くした時に始まった。翌年、彼は高山寺の現在地近くにある密教的な真言宗の寺院・神護寺に入った。その後、当時、最も重要な寺院の一つである奈良の東大寺で華嚴宗(中国語：Huayan; Flower Garland)を学んだ。彼は生涯にわたり、密教的な真言宗と華嚴宗を修行し、のちにその教えを自らの密教信仰に取り入れた。彼の革新的な教えは、日本に華嚴宗を広めるきっかけとなった。

明恵は何年もかけて、仏教の教えに対する献身を示す相応しい方法を見出そうとした。やがて彼が母親像としていた菩薩の仏眼仏母の像の前にひざまずいて片耳の一部を切り落とすことに至った。端正な容姿がこのような醜くなることによって、彼は煩惱からさらに遠かろうとした。

明恵の信仰は、当時の仏教と土着の神道の神々の崇拝との習合が反映されている。彼は特に奈良の春日大社の祭神である春日大明神に惹かれていた。彼の崇敬の念は非常に強く、仏教の発祥の地であるインドを巡礼するという長年の願いを、その計画に対する神の戒めに従って、あきらめた。春日大明神の明恵に対する影響は、高山寺境内に佇む春日明神神社で今も感じることができる。

明恵の功績は宗教思想にとどまらなかった。日本における茶の栽培の父とされる。明恵は、中国留学から帰国した禅師栄西(1141~1215 年)から茶の種の包みを授かり、高山寺近くの畑に種をまいた。高山寺から茶の栽培が全国に広まり、現在も境内で茶が収穫されている。

明恵は芸術を愛し、高山寺で著名な芸術家や知識人を集めた。彼が醸成した豊かな環境は、寺に伝わる多くの宝物の中に生き続けている。明恵自身の表現力は、約 40 年間綴られた夢記にも表れている。その細やかで広範な記述と現代との関連性は、国際的な関心を集めている。

明恵は篤い人道主義者でもあった。彼は特に戦乱での未亡人の窮状を懸念し、その多くが彼の門下生や支持者となった。多くの血が流れた、1221 年の承久の乱で京都の朝廷軍が鎌倉幕府軍に反乱し敗れると、朝廷に近い女性の多くが未亡人となった。彼らが寺に来たとき、明恵は彼らを匿い、仏教を教えた。やがて、彼は彼女らのために尼寺・善妙寺を建てた。この施設は華嚴宗の僧侶を守護するために龍に姿を変えた中国の伝説の女性、善妙(中国語：Shanmiao)にちなんで名付けられた。

明恵は 60 歳近くで最も親しい門下生や信者に囲まれて亡くなった。ある者はその後師について著述し、その作中の彼の姿は今日まで続くイメージ通り、人望のある英雄として描写されている。